おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和５(2023)年
８月号
通巻 636 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和５年８月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

与論島（鹿児島県）の浜　　福井市　齋藤正宏さん撮影（文・４頁）

昭和41(1966)年8月30日　東光大祭法話より

瑞祥（ずいしょう）と光明皇后　～大本宮の場所の決まった記念日～

法主　矢追日聖（満54歳）

心の目も開いて

今年は旧暦に閏（うるう）三月が入りますので少し遅れたように思いますが、いつも旧七月十五日に東光大祭というお祭りをしております。非常に暑うございますから足をくずして聞いてください。暑い時に堅苦しく座る戒律や行（ぎょう）のようなものをわざと付け加えて、辛い思いを我慢するという宗教もあるんですけれども、大倭の場合は別に無理しなくても構わないです。気持ちさえ真面目に聞いておれば、形は楽にしておってもいいんですから。

お盆の行事を今日やっておるという地方が今でも沢山ございますので、こちらへ先祖さんの法名だけこと付けて郷里に帰っておられる方がかなりあるんです。仏教で言うお盆だから大倭でお祭りをするというような意味はないんですけれども、霊界の方から見れば何か知らん密接不可分な結び付きがあるのかもしれない。しかし人間なりには、偶然と言うのが一番わかりやすいと思うんです。

これ以上進むと普通じゃわからないとこがあるんで遠慮させてもらいますけれども、『大倭新聞』の二号に、「和の光ここにあり、東方の光」とか書いておるのが皆さんの手元に行っているかと思うんです（※残部あり。野草社刊『やわらぎの黙示』所収）。東光大祭の意味はここに書いておきましたから、家にお帰りになってから、ゆっくりと読んでもらえばと思うんです。

私は考えて書いたというよりも心で書いているので、いつも言う霊の世界、霊界と我々人間の世界、現界と両方にまたがっているんです。それは大分に気違いじみておりますし、知識を通してはわかりにくいと思いますけれど、一応あなたたちが大倭にお集まりになっている以上は、肉眼だけじゃなしに心の眼も開いて読んでほしいんです。

この日に現われた瑞祥

昭和二十年八月十五日が終戦でございますが、それからちょうど一年たった旧七月十五日、昭和二十一年八月十二日（※旧暦に対して新暦の日付は毎年違う）の夕刻、終戦後の現代社会における宗教活動の中心というものを、現在我々がおりますこの場所に置くんだというような、霊界からの指図があったんです。

その時、東から西に向かって天にサーチライトのような形の、虹のような七色の光が射す自然現象もございました。正確な時刻はわかりませんが、ちょうど太陽が生駒の山に沈まんとする頃、この場所から見て東の方は春日の連峰ですが、その際からお月さんが顔を現わす頃だったんですね。

私は「東方の光」と言っていますが、これは霊界の姿じゃなく、その時の条件によって起こった現界の自然現象でございますから、どなたにも見えるし見た人もあると思うんです。

別に神様を拝んでいる時じゃないんですよ。私は牛を飼ってましたから、今のこの池の堤やその下の田の畔やらの土手に生えておる、牛に食わす青草を刈っておったんです。夕暮れ近くなってきたし、もうボチボチ家に帰る支度しなくちゃいけないしというような時に、なんぼ抵抗したって、上から頭がグーっと体ごと引っ張り上げられる。何事が起こっているんかとポッと上向いた瞬間に、大空にそういうような美しい奇瑞、瑞祥が出ておった。ただそれだけであれば、「こりゃ自然現象だな、きれいだな」と茫然と見てるだけなんですけれども、しばらくジーッと見ておったら、声が聞こえてきますねん。

それはいつもここでお唱えしている「黎明は訪れたり東方の光、大法は立てり大倭太加天腹」というような音声が、この大きな雲の向こう、宇宙のどこかから聞こえてくるんです。あれは自分の心の中の響きが高空に出て行って、逆に山彦のように聞こえたのかもわからないけれども、それは霊界の方のことですから、一般の人が聞こえるわけじゃない。そうした声と天に現われた一つの自然現象とが瞬間にして一致しているんですね。

そういうような不可思議というもの、これは皆さんも体験することがあると思うんです。例えば戦争中に空襲で焼夷弾が落とされて、もう死ぬんだと窮まったような時に、「あっち行け」とか「こっち行け」とか、瞬間に行くべき方向が自分でわかるとかいうように、咄嗟に何か閃く。あるいはふと首が動いた瞬間に、弾がそれて助かったとか、世間では奇跡だとよく言ってますわね。

私も、これは単なる自然現象やない、ただ事じゃないというような予感がしました。ここから見とって満月がちょうど東の山の際からズーッと一メートルほど上がった頃から、その光はだんだんと薄らいでなくなっていきました。

光明皇后について

大倭のこの場所は、千二百年の昔において光明皇后が住まいされていたという言い伝えがあるのですけれども、歴史の中でそのような記録はございませんし資料もありません。今、奈良の法華寺が光明皇后のお父さんである藤原不比等の屋敷だったとか言われてまして、これもはっきりしないんですが、法華寺が光明皇后のお住まいであったんと違うかと言うような学者もございます。

私が霊界を見ますとここに光明皇后がいらっしゃるので、私は家族として毎日一緒に暮らしておるわけですが、そんなことは人が信じてくれる裏付けにはなりません。

奈良朝時代の仏教というものは、聖武天皇が代表者となって非常に華々しい文化も作っております。仏教的な行き方というものが、日本の国の政治の中枢にも非常に強く食い込んでいました。唐へ渡って学問をしてきた坊さんたちも大臣級以上の位置におったんですね。

国策として全国に国分寺とか国分尼寺を建てて国を守り、世の中を治めようというような動きもあった。そういうような行き方の代表者は、表向きは聖武天皇になってますけれども、事実は光明皇后なんですよ。

奈良朝の頃は、政治的実力、権力を持っておる最高幹部を藤原氏で固めて、藤原一門の中から光明皇后は皇后に立たれておられたんです。聖武天皇のお母さんというのも、これまた光明皇后の姉さんに当たるんで、皇室の中も藤原ですから、まぁスメラミコトとしての聖武天皇は言わば置物のような立場なんですね。

だから光明皇后一人の考え方や行き方が日本の政治と結び付いていて、権力者と同じだけの仕事が出来たわけなんです。けれども別に名誉ほしいとか金儲けようとかいう野心は何もない。日本の国のことは我が意の如くになるんですから、個人的な欲望というものはそんなにありません。

純真な気持ちで仏さんに帰依し、全国にお寺を

建てて一生懸命仏さんにお祈りすれば世の中は良く治まり、悪病も退散するであろうと、まぁ男の政治家と違う真面目さがあるんです。

「気」は受け継ぐが繰り返さない

平城の都に堂塔伽藍（※東大寺は総国分寺であり、法華寺を総国分尼寺とした）を建てる時には、軍隊の徴用と同じことで政府の命令によって、大和へ大和へと各国から集まって来る。それで一年とか二年とか勤労奉仕をすることが、税金のうちに入るんですね。ところが帰る時になると、もう金はなくなってるし、大和の付近で乞食になったり行き倒れになったりというような哀れな人たちがたくさん出来たんですね。

あるいはまた仏教が来たがために、大陸の方からハンセン病とか疱瘡（＝天然痘）が日本に入って来ている。そういう病気が流行れば、これはもう人間の心が悪いんやから罪障消滅しなければいけないと、何か事あればお寺を建てる。そういう費用は、光明皇后個人の仕事のようにも見えますけれども、ほとんど政府の金なんです。

それで国内が経済的にはだんだん疲弊し、皆、生活に困窮してくる。その現実を見て光明皇后は悲田院、施薬院とかいうものを建てて慈善事業もやられたんです。今で言う救済事業、いわゆる社会事業ですね。

そのような非常に慈悲の深かった心の持ち主が、千二百年前、今我々がおりますこの土地の上で生活しておられた。だからこの土地に、光明皇后を中心とした「気の動き」というものが今の世になってムズムズと動きかけておるんです。一つの歴史の還元性と言いますかね、それで昭和の今日における大倭の仕事の中心、宗教活動の拠点にならなきゃいけないんかな、と。

大倭の宗教は奈良時代の仏教と全然違いますし、私は別に政治に関係するわけじゃありません。まぁ政治家が形の上において行っている政ではなく、社会の人たちの精神的な面において、言い換えれば心の中の政治ですね。自分個人の心を治めて、結局はみんな平和にしてゆこうやないか、と……。千二百年の歴史の流れが、光明皇后の気持ちよりもう一つ渦を大きくした、宗教的な本当の平和運動の根拠地というものが、この場所に今芽生えつつあると言えるんですね。

これは奈良朝時代にこの土地に蒔かれた種が、今形が変わって発芽しておるわけです。私がこの土地へ大倭の本拠である大本宮を持ってきた時に、霊界において光明皇后を始めとし、聖武天皇も非常に喜んでくれたんです。

だから奈良朝の仏教というものは、大した成功とは言えないんですね。形の文化、そうした方面は非常に発達して、今も古文化財で飯食っている現代人もたくさんおります。けれども宗教は形よりも精神内容なんですから、今は今なりにここで再び日本の一つの宗教として真面目に立ってほしいということです。光明皇后が仏教でやっておられたから、大倭も仏教でやらなきゃいけないというような繰り返しはしないんです。

人格霊と宇宙の気との違い

その理念というものは、仏教とか儒教とかがまだ日本に到来していない時の宗教、信仰状態を今ここに再現せよということなんです。その時代、原始人と言うたって我々と同じ人間なんですが、心の悟りとか心の力などは、現代人よりもはるかに優れておる人が沢山おった。そういうような人たちが直接私のところへ出て来るわけです。私はここで二十年ほど、そんな人たちと手を結び話し合って、大倭の行き方、即ち大倭教としてやっておるんです。

これは肉体は滅びてしまって霊魂だけが生きておる我々の仲間、同胞、「はらから」なんですね。姿もあり言葉もあります。死んだ世界においては時間は関係ないので、一万年前の人間と現代の私とでも、今日か昨日会うたくらいの気持ちだから、私が大倭で何かする場合にその古い仲間が出て来て、私が「どうだこうだ」と意見を言うと、「そうやないんや、こうしたらどうだ」と言うような、相談相手なんです。

人間は生まれて死んでまた生まれてという転生、生まれ変わりということがあるんです。私が一万年前に生まれておったこともあるし。今、肉体の入れ物の中に入ってますから、現代人に見えますけれども、一万年前の私の仲間たちが霊界から出て来ると、「我か我か」（※「我か」で「我か人か」の略。自他の区別がつかないさま。『広辞苑』による）というような形になるんですね。

普通は神さんからのお指図、あるいは霊示とかご神示とかいうように考えますけれども、私はそうは考えません。神さんのお指図は自分の霊感、勘によって来るんです。言葉とか姿とかじゃないんです。言葉は人間が便宜上作っておるんですから、あってもなくてもいいんですよ。宇宙の気というものの働き、また自分の心の表現の仕方というもの、我々人類から始まって一切のものを産み出した根本の心というもの、それは本当の神さん、宇宙の気なんですね。

自分の霊魂から宇宙の気に結び付いておる一つの電波みたいなものがあるんです。無電（※モールス信号）の場合はカチカチカチと音ばっかり来

るだけで、人間の約束やから言葉に直せますけれども、電波のようなものが宇宙から来た場合に、自分の頭の中で変換してね、「あー、これは、何だかんだ」って勝手に自分でわかるんですね。これが霊感というもので、我々生かされておる人間には皆誰にでもあるんですよ。たとえばね、虫が知らすとかパッとした思惑だとか、英語でインスピレーションとか言いますけれども、これ西洋でも日本でも一緒なんです。

ところが拝み屋さんから始まって世間の宗教はね、こんな姿の人が出て来てこんなお指図があったと、全部神さん扱いにしてしまう。霊界に入ったら神さんだと思ったら大間違いなんです。姿のない人間、人間霊、人霊は我々人間と同じで、腹も立てるし嘘も言います。ところが、「あ、神さんのおっしゃることやから正直に受け取らないかん、疑ったら罰が当たる」というように受け取るのが現代人の悪い癖なんです。宗教だとか心霊界の指導的立場にある人がほとんどそうです。これはまず大倭において根本的に教育せねばいかん、目を開けてやらなきゃいけないと思います。

今日の祭典の意味

この場所において、大倭として宗教的に本当の仕事をしていくことは、もちろん光明皇后の意思もございますけれども、天にまで瑞祥が出ておるのは天の気ですから、神さんの心なんですよ。大倭が拠点になって、我々人類が救われるように、みんなが仲良うしてゆくように、今日はその記念日に当たるんですね。それで東光大祭としてここで毎年繰り返しております。

その時にあなたたちのご先祖さんが、全部ここに集まっています。霊界には距離がありませんから瞬間に来られる。そして現界も喜び、霊界も喜んでいるんです。でも縁のない霊界人はやっぱり来られないんですよ。ここがまた面白う出来ているんです。

日本で言う祭りというのは、「まつろう」ということなんです。今日は仏教で言えばお盆なんですが、大倭ではこのようにしてもらえるという現界のあなたたちの心がまず先祖さんに行く。そして先祖さんを「待つ」。それからついて行く、まつろうて行く。こういうのが「祭り」の言葉の根源なんですね。

だから霊界の人たちは、「あぁ今日は大倭で供養してもらうんだ、その日にとにかく俺は抜かされたら困るんや」というようにして来ているんです。現界幽界両方合わせて「祭り」と言うんですから、あなたたちがお膳供えて手を合わすのを先祖さんも喜んでいるんです。霊界も現界もどっちもうまくゆくというのが祭りの根本なんです。ただお神輿を担いで騒ぐだけが祭りと違うんです。

それを仏教的には回向すると言うわけですけれども、大倭流では、今日は祖霊祭・東光祭にかけて、ご先祖の御霊と共に手を結んでね、両方から罪滅ぼしをやって幸せになってゆくという雰囲気を作っていると言いたい。それが今日の祭典の本当の意味なんです。

そういうことでございますので皆さん方が今日家に帰って、「先祖さんはお盆がすんだら西方浄土に行ってしまうのや」とか他人行儀な水臭いことやめてね、「寝ても起きても血のつながった先祖は、ただ肉体のない人間として自分の家族の中に毎日同居しているんだ」と、たとえばご飯食べる時にでも、まず柏手打って先祖さんも自分たちと一緒に食べてくださいという気持ちで生活をしてほしいんです。

（文責：編集部）

表紙写真について

齋藤　正宏

２０２０年、沖縄の本部港から2時間半の船旅でたどり着いた与論島（鹿児島県）の浜である。

与論島は、奄美大島、喜界島、加計呂麻島など8つの島々から成る奄美群島の最南端にあり、与論城跡からは沖縄本島の辺戸岬も眺望できる。

14世紀初め頃まで今帰仁城を拠点とする北山王朝に属していたが、中山王朝の尚巴志により滅ぼされ、琉球王朝に組み入れられた。

薩摩による琉球支配の時代を経て、明治時代から鹿児島県となったが、戦後は沖縄本島や八重山諸島と共に米軍の統治下に置かれた（１９４６）。

鹿児島県との往来を断たれた奄美では、生活の糧を求めて、多くの人々が沖縄本島へと移住した。中華人民共和国が成立し（１９４９）、朝鮮戦争が勃発する（１９５０）情勢下、米軍が進める基地建設に従事するためであった。

しかし１９５２年に奄美群島の返還が決まると、奄美出身者は職を追われ、公務員や会社役員等も含め沖縄からの退去を求められたという。

日本本土では既に高度経済成長期を迎えていたが、その恩恵は奄美の島々に届かず、毒性の高いソテツでも食する工夫をしなければならなかった（ソテツ地獄と言われたような時代も、それほど遠くなかった）。

その後、「日本最南端にある国境の島」として観光ブームに沸く（１９７０）が、沖縄返還（１９７２）以降は、その賑わいも失われている。

だが、那覇の喧騒を遠く離れた与論の静けさが私には好ましかった。珊瑚由来の白砂に座り、遠くの環礁で打ち上がる波の光を眺めていると、琉球弧の島々で生きてきた人々の念の渦とともに、島々の地霊の声が聞こえてくるように思えた。

令和５年５月29日～６月５日

こもれる魂魄の地を訪ねて（第54回）

東北・北海道の旅

杉本順一

その１　アテルイさんとの約束

旅慣れない私が今回はこんなことになりました。

東北とは書きましたが、実は平成17年10月号の『おおやまと』に「陸奥国へ（上）胆沢城址、北上川他を巡る」を記したまま今回まで実現出来なかった阿弓流為（アテルイ）との約束の実行のためなのです。

その約束とは、平成17年８月25日、陸奥国（むつのくに）に行くことを決めた時、アテルイさんに「ネガワクハ　ユクベキオリワ　イチドナラズ　フタタビノオトズレヲ　コイネガウモノナリ」（願わくは、行くべき折は　一度と言わず　再びの訪れを　こい願うものなり）と、言われていたことで、それを忘れるわけにはいかなかったのです。

東日本大震災がおきたため、再度の訪問はずいぶん先になりました。前回の東北の旅に同行してくれた娘も覚えてくれていたらしく、今回の旅行プランが始まりました。

５月29日その日がきました。８時45分、邑からMKタクシーで伊丹空港へ。10時50分、伊丹出発。たくさんの山々の龍神さん方に、飛行機が空を穢してしまうことに対して「ごめんなさい」の心あるのみ。操縦士さんやキャビンアテンダントさん達のお陰で快適な飛行でした。

飛行機が着陸態勢を取り始めた頃、アテルイさんが話してこられる。「ワレラノ　ヤクソク　ネガイ　ハタサレマス（我等の約束、願いが果たされます）」。アテルイさんも約束を忘れておられなかった。

12時10分、いわて花巻空港に無事着陸。早速レンタカーを借りる。前もって予約済とのこと。

高速道で「奥州市埋蔵文化財調査センター」に向かう。センターでは、アテルイ、モレさんの時代をドラマ仕立てで30分の映画を見せてもらった。分かりやすい映画でした。

次いで13時ごろ、巣伏古戦場跡公園へ。この古戦場であった記録を書き写しておこう。

関口明著『古代東北の蝦夷と北海道』（吉川弘文館）より

《……延暦八（七八九）年いよいよ阿弓流為らに指揮された胆沢地方の蝦夷（えみし）と戦うことになった。

七八九年三月、予定通り五万余りの征夷軍は、多賀城から胆沢の地へ出発し、その月のうちに衣川を渡り三ヶ所に営を置いた。ところが征夷軍は、一向に攻撃を開始する気配をみせなかったため、政府は「縁何事故……恐失其時」と執拗に征夷軍を責めた。六月三日条によると、政府の厳しい追及に副将軍入間広成・池田真枚は安倍墨縄と議して北上川の対岸に渡り、蝦夷を討つことを決定した。

直ちに中軍・後軍夫々二〇〇〇人を抽出した征夷軍は、賊師阿弓流為の本拠地に攻めこみ、そこにいた三〇〇人余りの蝦夷を追撃し巣伏村に至った。中軍・後軍は、そこで安倍墨縄に率いられた前軍と合流することになっていた。ところが前軍は、蝦夷に阻まれて渡河できず、一方、中軍・後軍も八〇〇人ばかりに増強された蝦夷に進撃を阻止され、さらには背後から三〇〇人ほどの蝦夷に退路を遮断された。このように分断されたうえ前後から挟撃された征夷軍は、なす術もなく瓦解したのである。この戦いで征夷軍は、負傷者二〇〇〇人近く、死者千有余（うち溺死者一〇三六人）と惨澹たる損害をこうむった。一方、蝦夷側の被害もひどく、斬首されたものが一〇〇人近く、焼き払われた村落は一四ケ村、八〇〇余烟に及んだ。》

この「巣伏の戦い」で、先ず蝦夷側と征夷側両方の戦没者達の鎮魂・慰霊の挨拶に始まり、幾度となく繰り返された蝦夷達と征夷軍の戦の犠牲者達に思いをはせる。

公園を出発して出羽神社（羽黒山山頂）にむかう。旅行プランを計画している娘たちがアテルイさんから「この地から蝦夷の国を見てほしい」と言われていたらしい。

下りの車と出会わないことを願いながら、細い道路を登った。山頂の古木は大きく育ってはいたが、下方に胆沢地方を拝むことが出来た。

３時ごろ吉祥天神に着く。このあたりは菅原道真公夫人と子供達の居られたところと言われている。駐車場には「菅公夫人の墓」と大きく出ていた。

お墓まで登坂を歩くことになり、私と長女が行くことにした。菅公夫人に霊界の道真さんと一緒にこの地への訪問を告げところ、いきなり夫人は叫ぶように「オナツカシイ、オナツカシイ……」と何度も何度も声を出されていた。

これで私はお２人揃って大倭太加天腹に入れることが出来ると安心した。

５時頃、高館義経堂近くに到着。堂はずいぶん高い所にあるようで、私と妻は、明日からの北海道行きを考え、ここは足を温存（?）させてもらって、そこへは娘２人が訪ねる。

ここは義経公の正妻と娘さんが居られたという伝承がある。（毛越寺ホームページ参照）

高速道路でアテルイさん達の水沢市までもどり予約の時間より早めに着いたが、「ささ忠」さんで夕食。モンテインホテル北上で１泊。

その２　いよいよ北海道へ

いきなりの長い余談です。私が北海道にご縁をえたのは、１９５８年８月、大阪の高校の修学旅行に始まります。旅行の日程は10泊11日。今思い出しても、凄まじいものでした。時間が長いだけではありません、当時は蒸気機関車で客席は全部木製の椅子でした。日本海側を走って青森駅へ、そこから船で函館まで。先生・生徒を二分してバス２台での移動。当時の道は、昭和天皇が車で移動されたわずかな部分だけ舗装されていた。バスは勿論クーラーなどない時代です。土煙りの道を２時間ずつでバスは前後を交代。

最近のテレビで見る北海道は別世界です。

30日朝９時10分いわて花巻空港出発。１時間ほどで新千歳空港に。ここでプロペラ機に乗り換え函館空港へ。今度は初めてのプロペラ機。座席右の窓から大きなプロペラが見えた。いよいよプロペラがうなり始める。この音を楽しんでいるうちに、ふと戦争中のことを思い出した。

当時父は津市の久居にあったプロペラ工場での仕事に駆り出されていた。一度だけ母が「お父さんの工場見にいこか」と私を背負って連れて行ってくれた思い出。もう一つ、父の弟、力一叔父のこと。叔父が乗った爆撃機がアメリカ軍機と遭遇戦、後部銃座の叔父が被弾、戦死した。ただし叔父の機は飛行場に戻ってきたとのこと。その日が私の２歳の誕生日であったと戦後まで生きていた他の叔父たちが教えてくれた。戦死日と誕生日の関係は、今も変わりません。

11時35分には函館空港に着いていた。車を借りて、市立函館博物館に行く。函館の歴史や文化の展示「はこだての歩み」「先史時代の函館」。

今回は「箱館戦争」に時間をかけた。箱館戦争は戊辰戦争最後の戦いを言う。私には耳慣れない言葉でした。

『広辞苑』に《戊辰戦争とは１８６８年（慶応４年・明治１年、戊辰の年）から翌年まで行われた新政府軍と旧幕府側との戦いの総称。鳥羽伏見の戦い、彰義隊の戦（上野戦争）、長岡・会津藩との戦争、箱館戦争などを含む。戊辰の役。》

榎本守恵著『**北海道の歴史**』（北海道新聞社）からもう少し知恵を貸していただこう。

《慶応三年（一八六七）十月十五日、将軍徳川慶喜の大政奉還、十二月九日王政復古の号令発布、二七〇年近くつづいた江戸幕府はくずれ去った。つづいて翌明治元年（慶応四）正月三日、鳥羽・伏見の戦いをきっかけに明治維新の内乱、戊辰戦争の幕は切っておろされた。…

旧幕府海軍副総裁であった榎本武揚は、徳川家の静岡七十万石移転をみとどけたあと、八月、蝦夷地（北海道）を開拓して徳川旧臣を救済したい旨政府に嘆願書を提出し、八隻の徳川艦隊を率いて江戸湾を脱走した。…

脱走軍は五稜郭を無血占領した。十一月一日、榎本は箱館平定を祝して祝砲をはなち、五稜郭に入城した。…（それに対し）…

青森に集結した政府陸軍は三隊に分かれ、到着した海軍とともに津軽海峡を渡り、まず乙部に上陸し、三道から進撃した。政府軍約八〇〇〇人、迎え撃つ榎本軍約三〇〇〇人、半数にも達しない榎本軍を相手に政府軍は苦戦を重ね、ある政府参謀は、これほど勇敢な抵抗は戊辰戦争いらいはじめてのことだと語った。しかし衆寡敵せず、箱館港の壮絶な海戦も、弁天砲台や千代ケ岱の奮戦もむなしく、一ヵ月余の死闘ののち、五月十七日、榎本は五稜郭を出て降伏した。…

この戦争で、御典医だった箱館病院院長の高松凌雲は、敵・味方を問わずに傷病兵を治療し、捕虜を送還するなど、日本における最初の赤十字精神の発露とたたえられている。また、政府軍戦死者の遺体は政府軍によって現函館護国神社に埋葬されたが、旧幕軍の死体は路上にそのまま放置された。江戸の新門辰五郎の子分といわれる箱館の侠客柳川熊吉は政府側のおどしにも屈せず、かれらの遺体を集めて八幡宮の裏山に葬った。明治八年、そこに碧血碑（へきけつひ）（義士の血は三年たてば碧色になるとのたとえ）が建てられた。》

この碑はかなり高い所なので、駐車場での挨拶になった。

博物館の中で、私は「土方歳三（新撰組）」に声をかけたら「ワレワレノヨウナモノデモ　ヨンデモラエルノデスネ」と言う。私にとっては意外な言葉でした。こんどは法主さんが「ミンナヲアツメテクル」と言われました。はてこの意味は？です。

それでも慰霊と鎮魂の挨拶は出来ました。

この後、五稜郭タワーの展望台に上がる。展望台から見る五稜郭は素晴らしい眺めでした。

この旅行の目的地に五稜郭を希望していた細君でしたが、展望台では足がすくんで真ん中あたりでずっと立っておりました。エレベータで地面についてから元気に長女と２人だけ五稜郭公園に歩いていきました。

夕食は寿司海鮮処函太郎さんで。

８時半頃　ホテル法華クラブ函館で１泊。

寸莎

第151回

廣瀬（ひろせ）　雅雄（まさお）さん

交野（かたの）ヶ原の物語を紡ぎたい

「父と誕生日が同じで、ケーキは2人で1つでした」。今回は、筆者が禊会（平成11年5月9日）にお誘いして、大倭とのご縁が始まった廣瀬雅雄さんにご登場いただきます。

大阪市東淀川区相川で昭和35年3月16日に生まれた。幼い頃、淀川が近くを流れる枚方市牧野に転居。「淀川（琵琶湖）の匂いが原風景」だ。

父の達雄さんは、戦時中、学徒動員で福生（ふっさ）（東京）の陸軍へ。汽車で鉄橋を渡る時に機銃掃射に遭い、右腕をなくされた。雅雄さんが物心ついた頃から、それが当たり前だったことと、ご自身も失明の可能性があったそうで、障がい者を分け隔てなく見る感覚が子供の頃からあった。

父は高校の数学の教師、母の小貴子さんは幼稚園の教師で、父方・母方ともに学校や習い事の教師ばかりの家系だった。ちなみに2つ上の実姉も小学校の教師だ。

小学生の頃、雅雄さんには、忘れられない出来事がある。大雨で集団下校中にはぐれてしまい、いつの間にかたった1人に。その上、川が増水して、胸の辺りまで水に浸かった。

「防災について関心が高い（現在、地域の自主防災組織の代表）のは、その体験が大きい」と話す。

授業中は、窓の外に見える送電鉄塔やアンテナに心惹かれた。線で繋がってもいないのに、ラジオやテレビから音や映像が出てくるのが不思議でならなかった。後にエンジニアになる原点だった。

中学生の頃、殴られていた同級生を助けたら、その後、自分が毎日暴行を受けるいじめにあったり、理不尽な教師からの体罰もあった。イジメ問題は人生の宿題になった。

高校は普通科だったが、無線通信技士の先生（定年退職後、地元神社の宮司になられているのを知り、再会）の話が面白く、大学は通信工学を専攻、とても充実していた。

卒業後、人間関係が苦手なので設計開発を行うマイコンエンジニアになり、高速道路の交通管制システム、家電空調機器のコントローラーやリモコンのハード・ソフト設計をした。

30歳を過ぎた頃、龍村仁監督のドキュメンタリー映画『地球交響曲（ガイアシンフォニー）』と出逢う。大阪等、各地での自主上映活動に関わった。仕事で東京出張のついでに小原田泰久さんの「イルカの学校」の集まりに出たり、龍村監督の事務所を訪ねたりしたこともあるという。

30代半ば、頭も回らなくなり、エンジニアの仕事を自主退職して、上映会のご縁で協和株式会社・ハイポニカ販売部で勤めることとなる。ハイポニカは、ガイアシンフォニーで取り上げられた「たった1粒のごく普通の種子から1万3千個の実がなるトマトの巨木を育てた」野澤重雄さんの会社で、すでに野澤先生は他界されていたが、トマトの巨木を管理していた技師の方から、植物たちのことをいろいろと教わった。

忘れられないのが、クリスマスの展示用に育てていたミニトマトのこと。秋に種まきをして日当たりのいい所で育てていたが、寒さでもう無理かなと思いながらも毎日、「クリスマスまでは頑張ってほしい」と声に出したり心を向けていた。結果、たくさんの見事な実をつけてくれた。深夜、事務所で仕事をしながら、「もうこれ以上頑張らなくていいよ。ありがとう」と心の中で声をかけたら、何か音がして、見に行くと、ミニトマトの実がポトポトと落ちている瞬間だった。植物にも心はあるという貴重な経験をした職場だったが、リーマンショックの影響もあり退職。

野澤先生が話されていた「永遠のイノチ」とは何だろうと、目に見えない世界に心惹かれていたが、「死んでからも束縛(?)される宗教には答えは見つからないだろう」と精神世界系の本を読んだり、セミナーに行くようになった。そこで、ヌーソロジーというチャネリングをベースにした考えを知り、幅と奥行きという概念がしっくりし、現在も研究中だ。

以前、彗星捜索家の木内鶴彦さんと発見した西暦535年の交野ヶ原の天空の地上絵について『おおやまと』（平成19年10月号参照）に書いた。ヌーソロジーから見た交野ヶ原の論文を書きたいと思っている。

大倭は「時々ふらっと立ち寄ることができ、自然体でいられる場所」だと言う。　（聞き手＝藤本宏秋）

あじさい日誌

7月9日　午後2時から大本宮拝殿において大倭会主催禊会。堤取子さん（奈良県平群町、元菅原園勤務）が久しぶりに参加。宗教活動中心（幸福の科学）の生活の由。万教帰一とか霊界の見方について話し合いました。

交流の家で、午後、FIWC関係の定例委員会が行われました。

7月14日　10時頃から大倭会館で活動している、リフォーム・真向法・押絵・てまりの各教室の皆さんで大倭会館の大掃除を行い、その後会食しました。

7月23日　大倭大本宮月次祭。

この日は昭和37年7月23日の法話をお聞きしました。平成17年9～10月号『おおやまと』に「現代における宗教改革とは」として掲載分です。

4時から大倭会館で大倭会役員会が行われました。下記の大倭会通信参照。

7月24日　10時から大本宮拝殿のエレベーター点検。

8月5日　午後6時から大倭会館で大倭町自治会役員会が開かれました。

8月6日　大倭神宮月次祭。

広島原爆の日で、午前8時15分、拝殿の太鼓が打ち鳴らされました。

午後6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

（菅原園）

7月7日　七夕の集いで、当日にネタを考えた職員による漫才を披露しました。

（須加宮寮）

8月1日　ずっと中止していた書道クラブを、今回から新しい先生で久しぶりに行いました。

（長曽根寮）

7月7日（特養）　七夕のレクリエーション。レースリボンで短冊を作成、読み上げたり飾り付けたりを楽しみました。

7月11日（デイ）　100歳の誕生日を迎えたられた方（八重垣園に入居中）のお祝いの会。

（茂毛蕗園）

7月13日　合同防災避難訓練。

（八重垣園）

7月27日　6回目のコロナワクチンの接種をしました。

こだまことだま

▼神奈川県横浜市　**加藤彰彦**

『おおやまと』5月号拝見しました。先日、水島照美さんが我が家にも来てくれ歌ってくれました。この世とあの世をつなぐメロディを感じました。

『水滴の自叙伝』、6月中にできそうです。

（筆名：野本三吉）

大倭会通信

令和5年度第2回役員会（幹事会）が、去る7月23日に大倭会館に於て開かれました。冒頭で出席者10名の近況報告。

暑さが続いているだけに健康状態についての話題も多く、幹事の高齢化（?!）を反映しているように感じました。コロナにかかったという報告もあり、まだまだ油断はできないですが、文化行事や文化講演会、禊会等を通して会員相互のコミュニケーションを深める機会が増えるとの期待も語られていました。

▼最初の議題は8月30日の東光大祭についてで、8月20日の大倭境内の大掃除も含めて大倭会としての取組みを話し合いました。大掃除は「掃除禊ぎ」としてとらえていますが、猛暑もあり無理をせずに参加しようと確認し合いました。

▼文化行事は10月1日・2日で例年よりひと月ばかり実施時期を早めています。これは寒くなる前の方が良いだろうという配慮もあってのことです。

今回は、あまり観光地でない、大倭と縁が深い訪問地が多く、味わい深い文化行事になりそうです。定員が限られているので、締め切りまでに早めに申し込んで下さい。

▼文化講演会は11月12日（日）、講師は人類学者でゴリラ研究で高名な山極壽一さんです。鋭い文明批判でも知られていて、法主さんの考え方との接点もいろいろあるのではないかと期待しています。

▼現状に合わせて大倭会会則の若干の変更を行います。またいずれ全文を紹介し、再認識して頂くようにします。（岸田）

▼6月号「あじさい日誌」で東方碑のところにタヌキがいたというのは、写真から見てアナグマかもしれない?（アライグマではない）という話題……。

▼欠席のNPO法人むすびの家理事長・湯浅進さん（顧問）からはメールがありました。

【交流の家・秋のフェスティバル】

❖10月28日（土）北海道・笹の墓標展示館――パネル展示とお話

❖10月29日（日）むすびの家コンサート――フォーク歌手の中川五郎さんのライブ、他に講演も検討中

あんない

＊月次祭（大倭神宮）

9月6日（水）　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

9月10日（日）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）

9月15日（金）　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）

9月23日（祝）　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第349回大倭会文化行事

～大倭に縁（ゆか）りの地を訪ねて紀伊方面へ～

日にち　令和5年10月1日（日）～2日（月）
1泊2日　※例年より早めです。

行き先　【1日目】高野山／長慶天皇陵／平維盛歴史の里など
【宿泊】龍神温泉　季楽里（きらり）
【2日目】日置神奈備（ひきかんなび）・日出神社／名草戸畔（なぐさとべ）伝承地・宇賀部（うかべ）神社など

費　用　2万6千円

申　込　8月31日まで（定員27名）

問合せ　教務本庁　0742-45-1192
溝口富士男　携帯 080-3101-1639
林　修三　携帯 080-2527-0840